

A76
84

極東の情勢について

国立国会図書館



0010830-000

A76-84

極東の情勢に就て

陸軍省調査班

1933

ABJ

A76

84

極東の情勢に就て

昭和八年十月十日
陸軍省調査班

A76
84

本書は其所に於ける講話集である。参考の爲配賦す。

319.2



1028421

目次

蘇聯邦に就て 二頁

支那に就て 八

米國に就て 三

結 言 三

目次

極東の情勢に就て

極東に於ける帝国内外の情勢を観るに、帝國は今やより重大なる非常時に直面してをる。事新しく茲に述ぶる迄もなく一九三五年三月には國際聯盟脱退の効力は發生する。同年には華府並倫敦條約改訂問題が起る。又蘇聯邦の第二次五年計畫は漸次進捗して其極東兵備の完成は益々帝國に對する脅威を増加する等國際的非常時が茲二三年を高潮時として到來する。帝國と密接なる關係を有する蘇支米等の諸國は此機を目標として著々國力を充實し戦備を整へる等痛切に非常時の深刻さを想はせるのである。

以下此等諸國の極東に於ける實情を紹介し帝國の直面せる非常時の真相を明らかにする。

蘇聯邦に就て

蘇聯邦東方政策の真相は既に小冊子を以て紹介し之に依て概ね盡してをる次第であるが、順序として重複を厭はず其要旨を述べ併せて其不備を補ふこととする。

蘇聯邦の極東政策は實にピーター大帝以來の傳統的國是であつて、露西亞帝國が蘇聯邦となつた今日に於ても何等の變更なきものであることは、彼のレニンが揚言した「吾人の運命は東方に於て決す」なる一言に依て明瞭にされてをる處である。今次滿洲事變に於ける彼等の態度、不侵略條約の提議、或は北滿鐵道讓渡の提議等に依りて直に以て蘇聯邦の東漸放棄等と即斷するものがあることは甚しき謬見であつて、正に彼等の術策に陥つたものと觀るべきである。

蘇聯邦の極東情勢に就ては茲に改めて述ぶまでもなく、萬事を放棄して五年計畫の完成に邁進してをるのであつて、現下直に外國と事を構ふるの不得策から打算した對外平和政策であることは常識的に首肯し得る處であるが、尙之を若干具體的に事實を指摘して裏書するならば次の如くである。

- 1 第一は極東に於ける軍備の充實である。極東に於ける蘇聯邦の軍備充實に就ては滿洲事變以來屢々紹介したところであるから其詳細は省略する。彼等の極東軍備充實の目的は觀方に依り或は守勢的或は積極的攻防如何様にも解釋し得るが、最近傳ふる所に依れば、浦鹽には航洋潜水艦數隻を既に艇水し、或は我が帝都を優に空襲し得る航續距離二、五〇〇吉(浦鹽—東京間一、〇〇〇吉)の超重爆撃飛行機十數臺が到着し、其他

機械化兵團、化學戰部隊等が整備せられてをる様子であるが、此等は何と解釋しても、辯明しても、純然たる攻撃兵器であつて、彼等の眞意の奈邊にあるかは明瞭である。

2 第二は蘇聯邦の國內整備五年計畫の完成作業である。

此五年計畫たるや、本年一月スターリンの「蘇聯邦の國防成れり」と豪語したる如く純然たる國防充實の作業であつて、而も其重點は國防力の東進であり、極東戰爭準備の擴充であることは多言を要しない所である。

軍需工業の中心點を西伯利に確立し、ウラルの鐵とクヅネツクの石炭とを巧に活用せんとするが如き、ザバイカル、ウスリー鐵道の複線工事、バイカル湖迂回鐵道の建設乃至は赤軍除隊兵の極東移住強制等悉く作戦

原點の東方推進であり、推進路の整備であることを想はせる。

3 第三としては最近報導せらるゝ所の米蘇復交、ウスリー鐵道の複線工事、浦鹽要塞の改築等の事實である。此等は世界經濟會議の決裂、米國の市場情勢等米國の弱點を巧に捕へ、利益を以て親善關係を復活し、以て我が帝國の國際危機たる一九三六年に於ける國際情勢を有利に指向せんとする深謀であると觀らるゝ。

4 第四は支那邊疆に對する赤化工作である。現在支那の領土であつて而も全然支那の威令行はれざる邊疆に蒙古、察哈爾、新疆等がある。而して此等地方に於ける蘇聯邦の勢力は實に想像以上であつて、殆ど蘇國の屬國化してをるものもある。外蒙古共和國の如きは其顯著なるものである。察哈爾、新疆方面に於ける赤化の情況は詳知するを得ないが、新聞等

の報道に依れば漸次外蒙と同様に進展の道程にあるもの、如くである。其詳細は他の機會に譲るが、盛に軍器を送りて國內擾亂を企て白色分子の驅逐を策し、或は赤化教育を完備したる蘇炳文等の敗殘既赤化兵を同地に送る等、手段を選ばず一路邊疆赤化に邁進してをる。抑々蘇聯邦の他國赤化工作の眞目的は、茲に述ぶる迄もなく外蒙共和國の如く其本國背反に依り蘇聯邦の一共和國となすにあることは固よりであるが、其過渡期に於ては赤化擾亂要すれば思想戰乃至武力戰の爲赤軍の作戰根據地たらしめんとするものである。以上邊疆地方の赤化工作は獨り支那のみならず、日滿議定書に依り滿洲防衛の任務を有する我が帝國の爲に甚大なる脅威である。此關係は滿洲の地圖を擴げて其邊疆を眺むれば一目瞭然たる如く、實に滿洲國を包圍するの態勢を示してをるのである。

以上數個の實例を以て示したる如く蘇聯邦現時の政策は、平和主義を抱懐するものではなく全くの假面を被つてをるもので、將に彼等が傳統の積極政策轉換の準備にあるものと斷じて憚からぬのである。

其國內の情勢、其實力よりして到底單獨我が帝國に抗し得られざる彼は、一九三六年前後に於ける我が國際的非常時に便乗せんとする彼一流の姦策は明に察し得る所であつて、彼の第二次五年計畫完成期が一九三七年なるに想倒せば決して晏如たる能はざる所である。方に彼等の消極的現勢は雄飛せんが爲の閉翼であり、動の前の靜であることは否み能はざる事實である。此の如き情勢に直面し不可侵條約の提議に心を許し、帝國の國防に缺陷あらんか、來るべき非常高潮時に如何なる事態の發生するやも圖り難いのである。嘗ては內的情勢良好ならざる一九二九年に敢然起つて露滿國境戰を挑んだ蘇國な

るに於て、更に／＼警戒を要するのである。若し夫れ吾人の準備に依り其時機に於て事なきを得、未然に戦争を阻止するを得ば正に策の上なるものと云ふべきである。

支那に就て

日支事變當面の相手國たる支那との間には、本年五月局地的ではあるが北支停戦協定成立して表面的には一段落を告げたかの如くであるが、支那は依然として「一面交渉、一面抵抗」を標榜して眞に明確な政策轉換の何物をも見せないのみならず、本夏七月乃至九月に實施した所謂廬山會議に於ては、暫く隱忍對日緩和の方針を取り、此間國力の充實、國內の整頓を圖り、近く來るべき支那としての好機を俟つて對日強硬策に轉換すべきを決定した旨報じて

をる。以下少しく廬山會議に就て述べる。

蔣介石は七月乃至九月の間に於て三回に亘りて政治並軍事に關係ある要人を江西省廬山に集め、内外重要諸問題の研究をなし、概ね次の如き事項を決定したと云ふことである。

- 1 蔣介石獨裁下の軍人委員會の權限を擴大し、陸海空軍元帥制を回復し、三年計畫を以て國防力の整備を完成す。
 - イ 蔣介石直轄の陸軍兵力現勢約三十師團を六十五師團に増加
 - ロ 空軍として飛行機千五百臺を新に整備
 - ハ 藍衣社を軍隊化し且全國的に之を普及速成する爲青訓工作の擴大
- 2 外交方針として三年間抗日策の緩和に依り以て日本の壓迫より離脱すると共に、他面國際聯盟其他の諸國に依存して日本を壓迫し、同時に其

等の援助に依りて國力の充實を圖る。

3 借款政策としては各國毎の個別的主義を採り、各國資本家より成る所謂數國借款團主義を排撃し以て日本の加入を絶對的に拒否する。

4 又經濟政策としては統制經濟計畫を實行し、全國經濟會議を擴充して經濟建設の最高機關たらしめ、以て全國の經濟並其關係事業籌劃の根源となすと共に、國際技術合作も本會議を通して遂行せしめ、別に經濟部を新設して實業、交通、鐵道、財政の四部を合併し、鐵道、郵便、船舶等各種收益事業を其管理下に置き以て財政、經濟萬般の事務を統轄す等以上に依て觀るに廬山會議の結果は軍事的獨裁者たる蔣介石と、財政の主宰者たる宋子文とが密接に合作し、外國の支援に依り非常時を乗り越へ、三年間に國力並軍備を充實整備し、其曉に於て徹底的抗日に轉ぜんとする計畫な

ることは著明であつて、吾人は彼等の所謂三年後なる意味を慎重に注意し大に準備することに努力せなければならぬ。

支那に對しては概ね以上に依りて盡きてをるわけであるが、尙吾人の注意すべき事實を一二附加して参考に資したい。

其第一は棉麥借款の問題である。本件は之を單なる經濟的事實として簡單に看過することは大に注意を要する處であつて、支那は固より極端な獨裁政治を敢行してをるのであるから、本借款に依りて得たる財物は獨裁者たる彼蔣介石の意圖の如く、軍備國內整備等上述廬山會議の決定遂行に用ひらるゝことは明なることであつて、單なる棉麥物件でなく抗日兵器であることに著目するの要がある。

第二は最近著しい發達を報ぜられてをる商業用航空路の開發である。民間航

空の發展は國土を開發し所謂文明の促進に資する固よりであるが、之を只單に文化事業として關心を拂はぬことは甚しき錯誤である。民間航空は軍事航空の豫備隊であり其缺を補ふものであることは、國際軍縮會議の論議を俟つまでもなく明瞭なる事實であつて、方に民間航空問題は軍事航空と同一なる價值と觀るべきである。戰時其飛行機は軍用として、其操縦者は飛行將校として、其發着場は軍用飛行場として何等の設備も附加することなく轉換し得るものである。況んや支那に於ては此事業は易々たる茶飯事であることに注意するを要する。

以上に依りて支那が一九三六年を指して如何に其計畫を樹て、之に向ひ一路完成に邁進してをるかを察することが出来る。而して彼等が傳統の以夷制夷主義に基き他國に便乘したる場合、而も其國力、兵備を整備したる曉に想

到するとき、吾人は決して既往の支那と同一に觀ることは許されぬであらう。

米國に就て

米國と帝國とが極東の問題に關して事毎に意見の疎隔を見ることは改めて茲に述ぶる迄もないのであるが、今次日支事變乃至帝國の聯盟脫退通告後に於ける著明なる事項を擧ぐれば次の如きものがある。

- 1 滿洲國承認問題
- 2 海軍條約改訂問題
- 3 對支發展

滿洲國承認問題

極東の情勢に就て

本年五月北支に於ける停戦協定の成立は見たが、本事變の根本である滿洲國の承認には何等の曙光も見出せない。否殆ど全世界が不承認を稱へてをる。就中此關係は爾他國際聯盟依存至上主義諸國と異り、米國は自己の打算から割出して根柢的に反對をしてをるのである。之に關する詳説は既に公表されてをるから省略するが、此點特に米國が附和雷同的でなく、國策的に反對してをる點は特に注意するを要する(米國海軍作戰部長は本年八月三十日「日支事變解決までは太平洋集中艦隊を大西洋に歸還せしめない」と述べてをる)。而も我が國は滿洲に關し完全に之を承認し日滿議定書を締結し聯盟脫退をも敢行したのであつて、國家として、國民として、是が非でも所期の目的を達成せねばならぬ事項である。

海軍條約改訂問題

國防の安全を期し得ざる條約の撤廢は既に帝國國民の聲であり、帝國の方針であり、既に國際聯盟軍縮會議に於て發表せられた處である。即ち屈辱的軍縮條約改廢は國家主義に醒めたる皇國日本の確乎不動の叫なのである。而して我が皇國日本の行手を遮ざる者は條約國たる英米であることは既定の事實であると共に、既に彼等は公然と其旨を聲明した處である(本年五月米海相は「若し日本が海軍力の均等を主張することがあれば米國は絶対に賛意を表すること出來ぬ」と聲明を發表してをる)。而も實質的に英米特に米國の條約改訂期を目標とする海軍擴張計畫は著明の事實である。

(ロンドン條約後のもの)

改装中 主力艦 五 大巡洋艦 九 其他計 一七

建造中 航空母艦 一 大巡洋艦 五 其他計 一六

本年八月建艦命令のもの

航空母艦 二 大巡洋艦 一 其他計 (三七)

此時に際し宜しく此海軍擴張計畫の目的精神の奈邊にあるかを洞察するの必要を特に指摘する。

對支發展

世界經濟會議の停頓並殖民地を有せざる米國の市場關係並米國自體の産業狀態等よりして、米國が經濟的に四億の大衆を抱擁する支那に對して甚大なる關心を有し銳意其努力を集中することは蓋し多言を要しない。其最近に於ける情況を示せば次の如くであるが、其結果が如何なる情勢

を形成するや、我が帝國の國防に如何なる影響を與ふるや、我が經濟發展と如何に交錯するやを特に指摘し、讀者の注意を倍愆したいと思ふ。

米國の對支活動中特に注目すべきは航空勢力の扶殖であつて、既に述べた如く航空勢力扶殖は支那に對する軍事的援助であり、有事の場合に於ける彼等の極東根據地の擴充であることに誤りはない。

1 中央空軍に對する米國勢力の確立

昨年來杭州飛行學校に米國教官J H ジョネット大佐を總顧問とし十五名の米人を聘し、操縦者の養成並運用術の教育に資し、又航空隊は近く一隊七機總計三五〇機に擴張せられ、新鋭機は全部米機を以て整備せられると謂ふことである。

南京政府は米國より昨秋十二機、今春三十一機の飛行機を購入し、更にカーチス會社に戦闘機三十六機を注文し、其十九機は既に上海に到着したと報ぜられてをる。

2 楊子江口附近に米飛行根據地設定運動

昨秋來傳へらるゝ所に依れば、米國は日本に對する防衛上抗州支那飛行場及浙江省南部温州附近に數箇所の飛行根據候補地を選定し、之が獲得に關し極秘裡に計畫を進めつゝあると云ふことである。

3 航空借款乃至密約説

昭和七年末以來米支航空借款乃至密約成立説が傳へられてをる。試に其一説を擧ぐれば次の如くである。

借款額 一、五〇〇萬弗

條件 海州等の東方海岸に米國飛行根據地の設定受諾

用途 本借款に依り向ふ二箇年間に米國より飛行機五〇〇

臺の購入

進行の度 既に蔣介石と米國代表との間に假調印を了し一部の飛行機既に到着すと傳へらる。

4 中國航空公司を買収

中國航空公司(支那資本五割五分、米資本四割五分)は現在上海—北平、上海—漢口—重慶間の航路を經營中であるが、本年四月汎米航空會社に全部を譲渡し、且同社の汎太平洋航空會社は上海、香港、馬尼刺間の試験飛行を完成し、近く前記航空路と連絡し、支那—馬尼刺—桑港の連絡が完成する筈である。

5 米支直通無線通信權問題

米支通信勢力の對支進出は最近更に一步を進め、去る四月米國馬凱無線電信公司是國民政府との間に通信條約を結び通信權を獲得し、同時に中國電氣公司(米資本)は無線電話機購入契約の成立を見た。

6 廣東に對する米國の策動

米國は南京政府の一敵國たる廣東に對しても、陳濟棠の政治顧問及軍事顧問等(米軍人)を通じて種々策動の歩を進め、嘗に陳濟棠を援助して軍備の充實を圖るのみならず、或は抗日機運を利用して對日宣戰を煽動し、或は反蔣氣分に乘じ米國を背景とする西南政府の獨立運動に狂奔する等の暗躍を續けて來たことは著名の事實である。

る。

7 福建に於ける米國の策動

福建省は臺灣と一葦帶水の地であつて、明治三十一年我に不割讓を約した特殊の地である。而して米國は此地方に對しても利權の獲得、軍需品の賣込、軍事的根據地の占領(福建防空計畫を援助し其代償として海軍根據地の獲得及十九路軍援助の代償として、海空軍根據地の獲得)等に奔走中であると報じてをる。

結 言

極東に於ける各國就中蘇、支、米の狀況右の如く、何れも一九三五年前後を目標として有ゆる方面に對し著々對日戰爭準備乃至勢力扶植に努力を傾注し

て居り、帝國としては到底晏如たるを得ない情勢である。此現況に於て帝國は有事の際嗟臍の悔を貽さざる丈の準備は如何なる犠牲を忍んでも之を爲さねばならぬことは勿論である。而も此危機たるや一二年の後に迫つてをるのであるから、之が準備は少しの遲疑も溢滞も許されない。此準備ありて始めて禍を轉じて福となし、戦争を未然に防止し得るであらう。最近滿洲國の獨立承認、上海並北支停戦協定の成立、國際聯盟の脱退等に依り事變は段落を告げ、非常時は解消せりとの聲を聞くのであるが、併し乍ら此等のことは一として解決したものはなく悉く未解決の問題であつて、云はゞ一時休戦の状態にありと觀るべきであり、事實は未だ事變中なのである。彼の三十年戦争或は七年戦争の如きも、常に戦争状態が連続してをつたわけてなく、戦争と平和即停戦との交錯の持續であつて、今次事變の現状と同一であつたのである。

方に現情勢も當分斯くの如き状態が續くものと覺悟せねばならぬ。之を以て吾人は益々舉國一致小成に安ずることなく、堅確なる精神を渝らず把持し、甦生したる皇國日本の實を發揮することに精進すると共に、有形無形有ゆる戦備を整ふることが刻下の急務であることを一言警告して筆を擱く。





